

ご利益情報の内容を分析した上で、従来流行神とされてきた神仏と比較してその特徴をまとめた。①出現形態。宮田登は寺院の境内仏に特別な靈験を付与して、流行神仏となった例の他、一般に流行神仏の出現の仕方には、土中出現型・空中飛來型・海上漂着型の三タイプがあると述べたが(宮田登『近世の流行神』一九七二、三二)、仙台幸子の場合はそのいずれにも属せず、インターネットというバーチャルな世界から始まった。これはまさに、インターネットが普及している現代ならではの出現過程と言える。②宗教者の関与。流行神が展開していく場合、必ず神や仏の新しい靈験を創作する宗教者が介在している(宮田登は論じた(同前、二八)。この点、鈴木岩弓が取り上げた「首無地藏」や「横樋観音」の事例においても、民間宗教者の関与が確認された(鈴木岩弓『流行神』の形成とその展開に関する実証的研究——中国地方の事例を中心に』一九九二、四五)。それに対して、仙台幸子の場合には全く宗教者が関与せず、仙台幸子の情報を世に知らせたのは俗人の実の娘であった。娘の峰ハチヨは従来の民間宗教者と同じように、仙台幸子の「靈験」を世に知らしめる役割を果たしてきた。③信仰者の関わり方。これまで指摘されてきた流行神の事例からは、信仰者と神仏との関わり方はどれも「参詣」を通じてなされている。それゆえ、参詣者の多寡から流行りの度合いを把握することも可能であった。この点仙台幸子の場合はその鎮座地がないため、「参詣」のような行動が確認できなかった。神仏に対して人が関わる現実空間がない点は、従来の流行神にはみられない点である。

総じて言えば、仙台幸子が流行していった過程において、インターネットは重要な役割を果たしていた。インターネットを通じたことで、人と神仏との関わり方に変化が生じ、「参詣」を通じた直接接合が不要となったのである。仙台幸子の流行からは、現代人が抱えている「神仏の所に行かなくても、ご利益があれば」という現世利益志向を伺うことができる。今後は、インターネットというバーチャル空間における信仰のあり方に注目する必要があると考える。

祝(ハフリ)と動物供儀

鈴木良幸

「ハフリ」「ホオリ」「ハオリ」などの呼称は、銀鏡神社(宮崎県西都市)、諏訪大社(長野県諏訪市と茅野市)、愛知県北設楽郡の教社、大山祇神社(愛媛県越智郡大三嶋町)などに残る、または残っていたことが知られる。さらに柳田によれば、山間部や諸島などに点在してつたわっている(柳田国男『定本柳田国男集第十卷』筑摩書房、一九六九、二七五―二七七)。

動物供儀には、屠り(ハフリ)がついてまわる。古代において、あるものの死には、さまざまな崇りや恨みが作用していると考えられた。動物の死には、人間の行ないによる崇りや恨みなど、さまざまな要素が凝縮されて結果する。それは乱獲や独占などの例をあげるまでもなく、人間と動物のみならず、動物を取り巻く人間と人間の間にも複合して関連しうる。このよう

に、ハフリという呼称の古態について考えることは、動物を殺すことと宗教儀礼との関係の古層を考える一つのアプローチとなりうる。

ハフリには、律令以前からの長く重層的な歴史がある。およそ村々の土酋として存在したハフリは、律令制度によって国家の組織に組み込まれていく。本報告では、律令制施行当時の古文獻を検証しなおすことで、ハフリの原像にアプローチすることを企図した。

西郷によれば「ハフリ」の語は、「屠り」「祝部」「葬り」「放り」「溢り」とも通じ、根底には「屠る」ことがあると指摘する。さらに「ハフリ」は、古代においては村々の土酋に近い存在であり、村々の神をいつくハフリは、イケニへを屠り、神を饗し、神と交わる巫者であったと推定している(西郷信綱『神話と国家』一九七七、一六七―一七〇)。

以上をふまえて『古事記』『日本書紀』『播磨国風土記』『万葉集』における、最古とみられる「ハフリ」の使用事例を分析すると、その概念は、以下のようにまとめることができる。まず前提としてハフリは、村々の土酋的な存在であった。次に、動詞としての「ハフリ」は、死ぬこと、殺すことに深く関わり、(一)特に死んで魂が離れていくという意味をもつ。また、個人的、社会的な災いを祓う役割の呼称としての「ハフリ」は、(二)呪術にたけ、身をつつしんで、永遠に奉仕する犠牲をほらい、神にイツキ祭る者をさす。これにより神憑りして、神意をつたえる者である。ゆえにその行為は神の行為とされる。さらに、(三)殺された、または意にそぐわぬ死者の魂を祭

り、たたりを祓う者である。だがそれには命という最大の犠牲が必要となることもある。これが発展して、葬儀することも指す。こうした祭を怠ると、たたりを遭い困ったこと、立ち行かぬことが起こる。よって神にイツキ祭ることが重要となる。西郷によれば「マツルは、目上のものに何かを献ずるのが本義である。それに対し、イツクは身をつつしみ、聖なるものに仕えること」をさす(西郷信綱『古事記注釈 第一巻』平凡社、一九七五、二一八―二一九)。

またハフリがイツク対象は、意にそぐわぬ死をとげた者、荒ぶる国つ神などの生者、災いをもたらす自然、木などの自然、刀などの優れた物など、さまざまであった。

以上のことから、動物供養との関係に焦点をあてれば、次のことがいえよう。不慮の死をとげたものを、ハフリがまつことは、動物を屠った(不慮の死をとげた)際にハフリが身をつつしんで、その魂にイツキまつることにつながるのではないだろうか。

当時の世界観において、自らの行為の善性は、ふりかかる災いによって判断された。災い起きると、祟りを祓うことで善へと導き、世間の秩序をもたらそうとした。如何様な力ともなる荒ぶる神や人間の力を越えた災いには、ハフリのような身をつつしみ、清浄さをもつ、神であり人間でもある者が秩序を形成する必要があったのだと考えられる。